

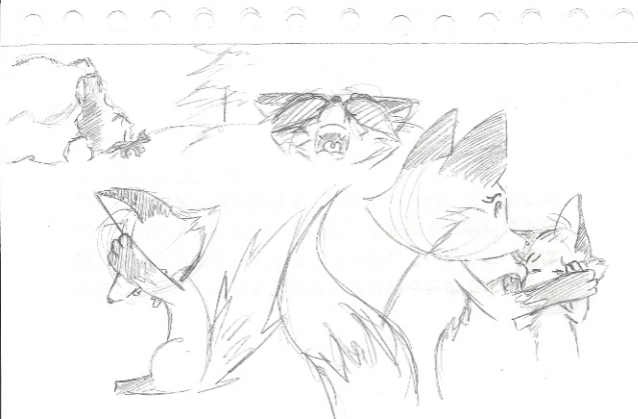
手袋を

買いに



寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

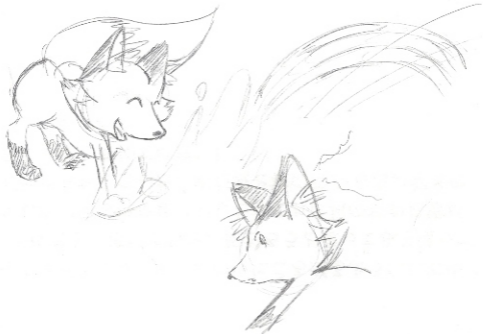
或朝洞穴から子供の狐が出ようとしたのですが、「あっ」と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて頂戴早く早く」と言いました。母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供の手を恐る恐るとりかけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解りました。



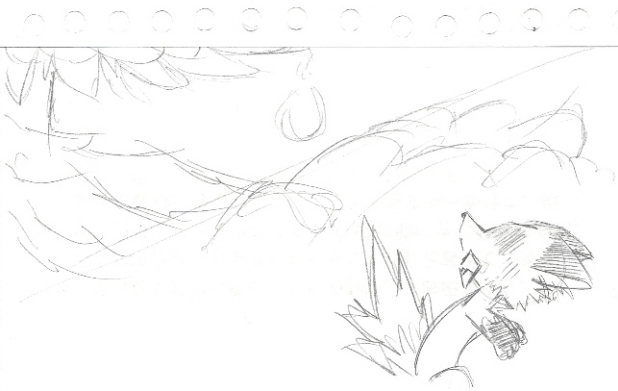
昨夜のうちに、真白な雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照していたので、雪は眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、あまり強い反射をうけたので、眼に何か刺さったと思ったのです。



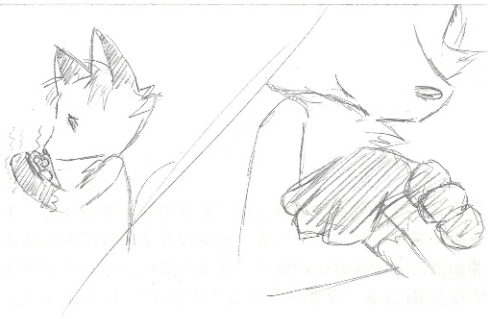
子供の狐は遊びに行きました。真綿のように柔かい雪の上を駆け廻ると、雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がずっと映るのです。すると突然、うしろで、「どたどた、ざーっ」と物凄い音がして、パン粉のような粉雪が、ふわーっと子狐におっかぶさって来ました。



子狐はびっくりして、雪の中にくろがるようにして十^{じゅう}米^{メートル}も向こうへ逃げました。何だろうと思^{おも}ってふり返^{かえ}って見^みましたが何^{なに}もい^いませんでした。それは樅^{もみぢ}の枝^{えだ}から雪^{ゆき}がなだれ落^おちたのでした。まだ枝^{えだ}と枝^{えだ}の間^まから白^{しろ}い絹糸^{きぬいと}のように雪^{ゆき}がこぼれていました。



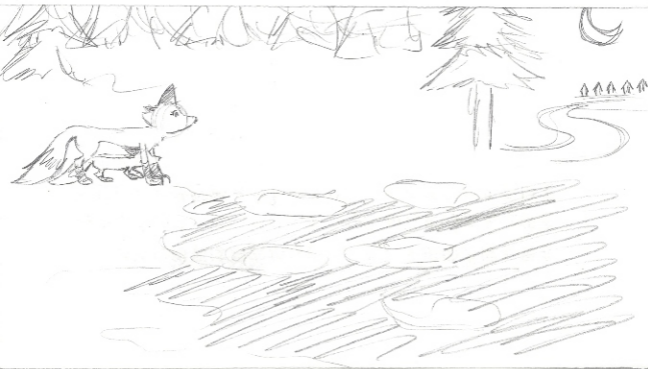
間もなく洞穴へ帰って来た子狐は、「お母ちゃん、お
手々が冷たい、お手々がちんちんする」と言って、濡れ
て牡丹色になった両手を母さん狐の前にさしだしました。
母さん狐は、その手に、は——っと息をふっかけて、ぬ
くとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、



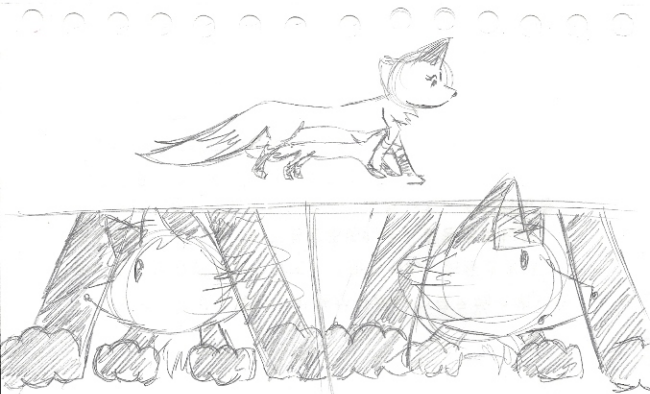
「もうすぐ暖くなるよ、雪をさわると、すぐ暖くなる
もんだよ」といいましたが、かあい坊やの手に霜焼が
できてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行っ
て、坊やのお手々にあうような毛糸の手袋を買ってやろ
うと思いました。



暗い暗い夜が風呂敷のような影をひろげて野原や森を包みにやって来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがっていました。



親子の銀狐は洞穴から出ました。子供の方はお母さんのお腹の下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせながら、あっちやこっちを見ながら歩いて行きました。

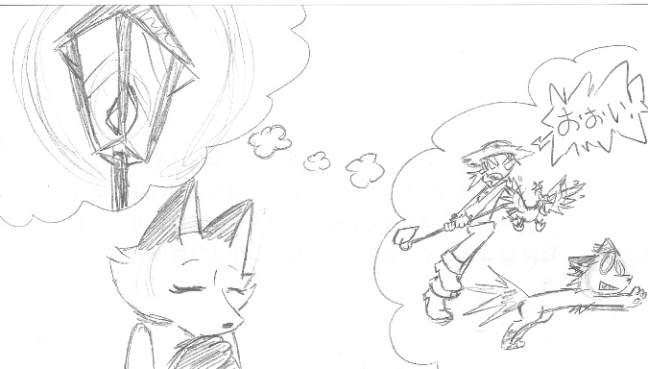


やがて、行手にぼつりあかりが一つ見え始めました。
それを子供の狐が見つけて、「母ちゃん、お星さまは、
あんな低いところにも落ちてるのねえ」とききました。
「あれはお星さまじゃないのよ」と言って、その時母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯なんだよ」



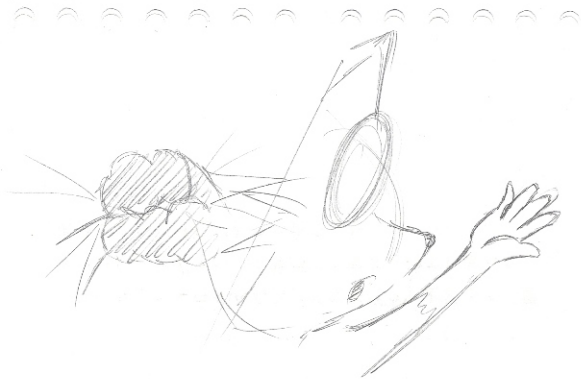
その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行って、とんだめにあったことを思い出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友達の狐が、或る家の家鴨を盗もうとしたので、お百姓に見つかって、さんざ追いまくられて、命からがら逃げたことでした。



「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」と子供の狐が腹の下から言うのですが、母さん狐はどうしても戻すすまないのでした。そこで、しかたがないので、^{ひとり}だけ^{まち}を一人で町まで行かせることになりました。



「坊やお手々を片方お出し」とお母さん狐がいました。
その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、可愛い
人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその
手をひろげたり握ったり、抓って見たり、嗅いで見たり
しました。



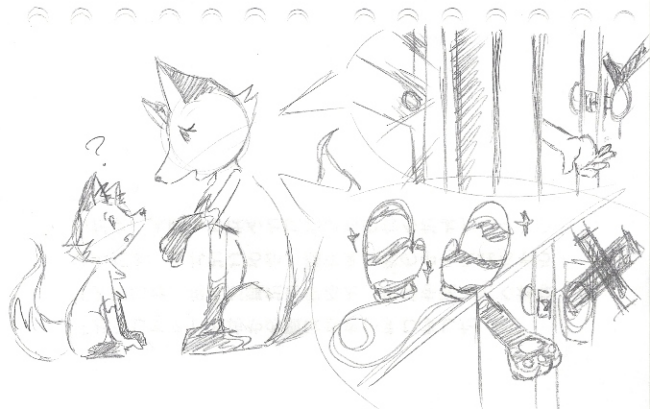
「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」と言って、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。



「それは人間の^{にんげん}手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、
たくさん人間の^{まど}家があるからね、まず表に円い^{まる}シャッポ
の着板^{かきいた}のかかっている家を探^{さが}すんだよ。それが見^みつかつ
たらね、トントンと戸^{かど}を叩^{たた}いて、今晚^{こんばん}はって^い言うんだよ。

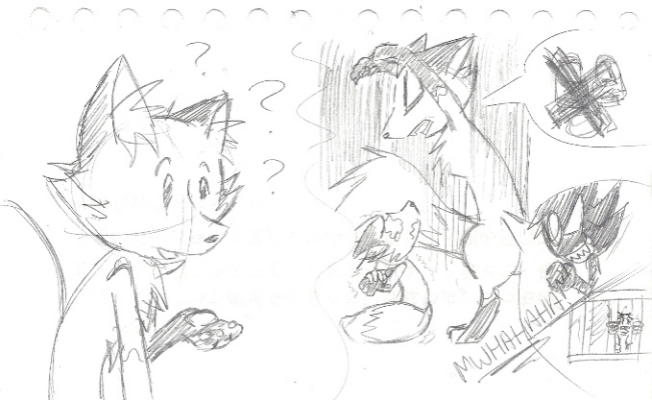


そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあける
からね、その戸の隙間から、こっちの手、ほらこの人間の
手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋頂戴つ
て言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を
出しちゃ駄目よ」と母さん狐は言いきかせました。



「どうして？」と坊やの狐はききかえしました。

「人間はね、相手が狐だと解ると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、掴まえて檻の中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとに恐いものなんだよ」

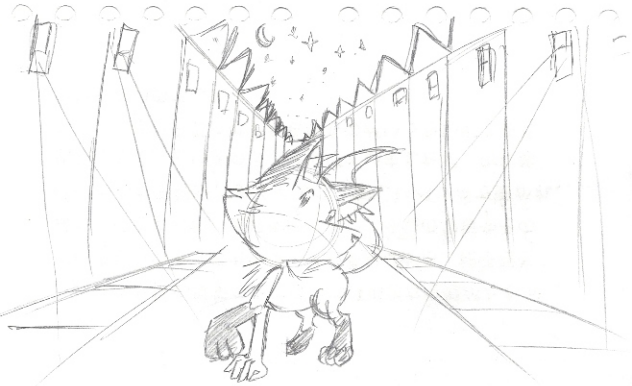


「ふーん」

「決して、こっちの手を出しちゃいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ」と言って、母さんの狐は、持って来た二つの白銅貨を、人間の手の方へ握らせてやりました。



子供の狐は、町の灯を目あてに、雪あかりの野原を
よちよちやって行きました。始めのうちは一つきりだっ
た灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。
狐の子供はそれを見て、灯には、星と同じように、赤い
のや黄いのや青いのあるんだなと思いました。やがて
町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸を閉めて
しまって、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落
ちているばかりでした。



けれど表の看板の上には大いおおいい小さな電燈でんとうがともって
いたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋ぼうしやを
探さがして行きました。自転車じてんしゃの看板かんばんや、眼鏡めがねの看板かんばんやその
他ほかいろいろな看板かんばんが、あるものは、新しいペンキで画かかれ、
或あるものは、古い壁かべのようにはげていましたが、町に始
めて出て来た子狐にはそれらのものがいったい何である
か分わからないのでした。

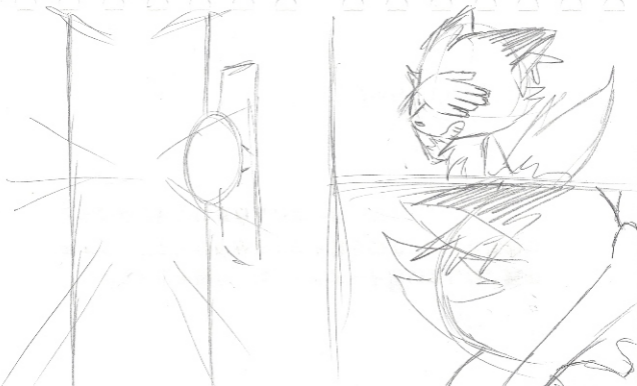


「今晚は」

すると、中では何かことごと音がしていましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、——お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

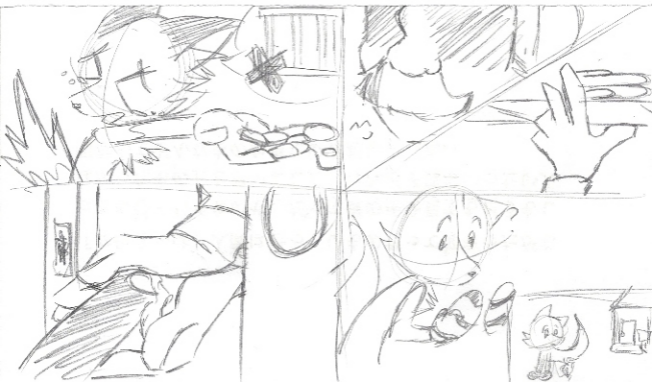


すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきつと木の葉で買いに来たんだなと思いました。

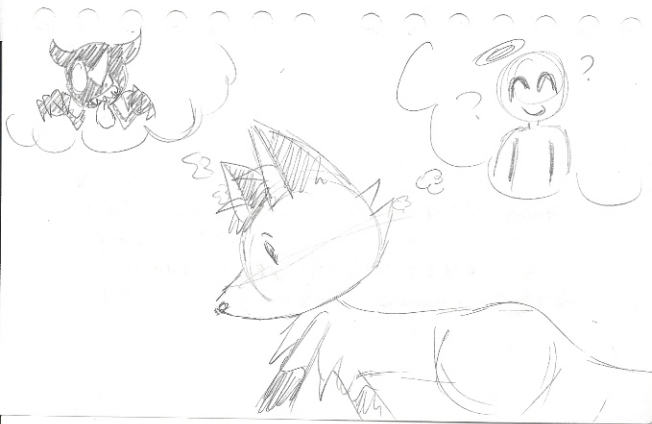


そこで、

「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんへ渡しました。帽子屋さんへはそれを人差し指のさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。

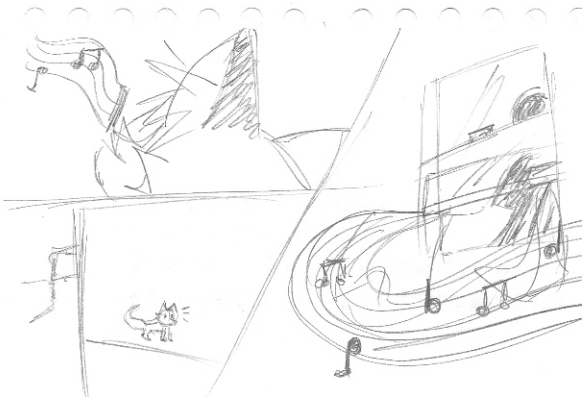


「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰有ったがち
っとも恐ろしくないや。だって僕の手を見てもどうもし
なかったもの」と思いました。けれど子狐はいったい人
間なんてどんなものか見たいと思いました。

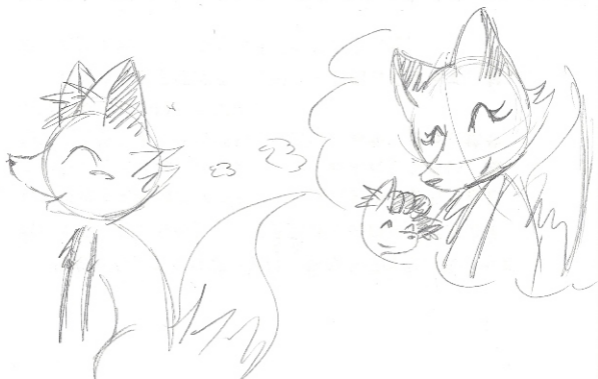


ある窓の下を通りかかると、人間の声がありました。
何というやさしい、何という美しい、何と言うおっとり
した声なのでしょう。

「ねむれ ねむれ 母の胸に、ねむれ ねむれ 母の手
に——」

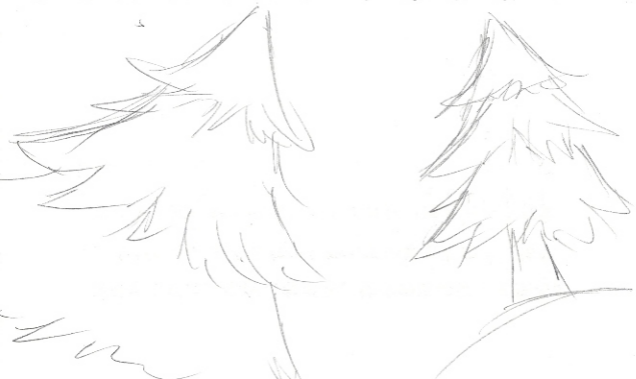


子狐はその唄声は、きっと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。するとこんどは、子供の声がありました。

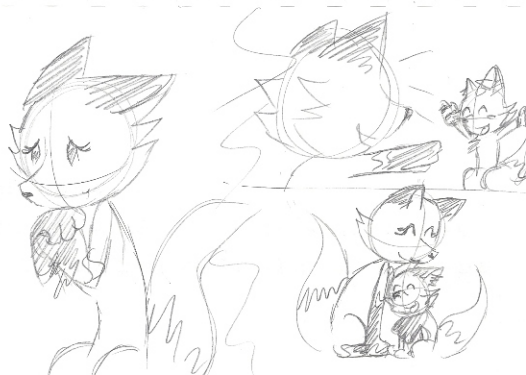


「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって啼いてるでしょうね」すると母さんの声が、「森の子狐もお母さん狐のお唄をきいて、^{ほら}洞穴の中で眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きっと坊やの方が早くねんねしますよ」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなって、お母さん狐の待っている方へ跳んで行きました。



お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰って来るのを、今か今かとふるえながら待っていましたので、坊やが来ると、暖い胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。



二匹の狐は森の方へ帰って行きました。月が出たので、
狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの
影^{かげ}がたまりました。

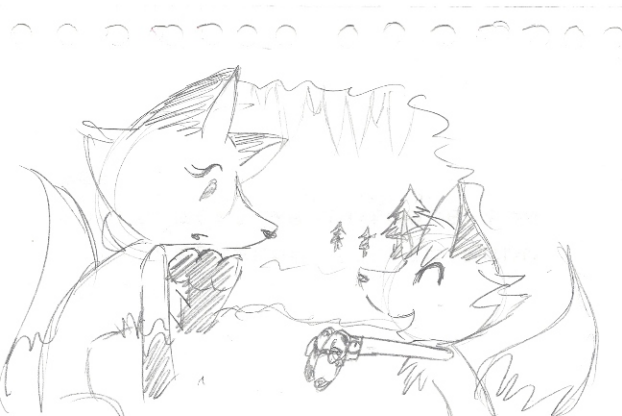


「母ちゃん、人間ってちっとも^{こわ}惑かないや」

「どうして？」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、掴まえやしなかったもの。ちゃんとこんないい暖い手袋くれたもの」

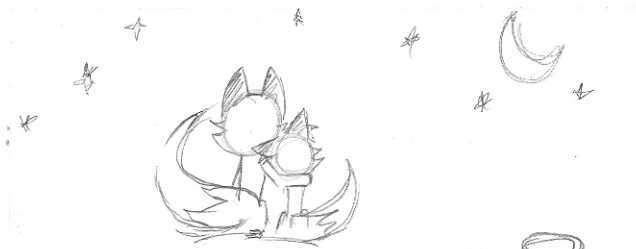
と言って手袋のはまった両手をパンパンやって見せました。



お母さん狐は、

「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやきました。





終わッ

